

アイヌの叙事詩「メノコユカラ」(婦女詞曲)

— 若干のテキストについて —

荻原 眞子

はしめこ

緩やかな節を伴って謡われるユカラ(ユーカラ)には、「神々ユカラ」と「人間のユカラ」が区別され、この後者には主人公が少年英雄の場合と女主人公の場合がある。しかしながら、これまでアイヌ叙事詩の研究では、英雄叙事詩として少年英雄の武勇譚がユカラ Y'ukar の代名詞として知られ、女主人公の叙事詩メノコユカラ (Menokoyukar/Matyukar) もしくはハウ(Hau)には目配りがなされてこなかったと云って過言ではない。メノコユカラについては公刊されたテキストがごく限られている。その理由はともかく、従来の研究の偏りを排し、叙事詩全般に公正な目を向けることこそアイヌの口承文芸研究にとつて緊要なことであると思う。

アイヌの口承文芸の名称とその指示する対象は地方により異なっていることが少なくない。文献にはメノコユカラとならん

でマチューカル machukar、マヌツカル matnukar という語が見られる。その義は「女のユカラ」であるが、「釧路及び北見では神謡をそう呼ぶ人もある」という「知里一九五五、一一七」。但し、本稿では神謡(カムイユカラ)ではなく、女性が主人公の叙事詩に限定し、これをメノコユカラとして考察することにする。とはいえ、このメノコユカラについても語り手、研究者の間に見解の差異がみられる。ここでは「メノコユカラ／婦女詞曲」として公刊されているテキストのいくつかを中心にアイヌ叙事詩研究の見通しを考えてみたい。

一 メノコユカラの初期のテキスト

メノコユカラとして公刊された初期のテキストとしてニコライ・ネフスキーの露訳二話がある。そのうち一話はドナルド・フィリパイによる英訳の類話である。原文は一九二二年に久保寺逸彦がシウンコツ出身のコポアヌ嬸から採録したテキストである。

メノココカラについてネフスキーは次のように記している。

「主人公が男である英雄物語とならんで、主人公が女である歌物語も沢山ある。もし、この女の主人公がシスタブカウンマツト、つまりシスタブカの女性ならば、物語はメノココユール〔女の歌〕と呼ばれ、オタシユドトマツト、つまりオタシユドの女性ならハウと呼ばれる。この一連の物語の保持者と語り手は女性である。ユールが戸外でのアイヌの昔日の戦闘生活を描写しているとすれば、メノココユールは家内の生活、それも特にアイヌ女性のそれを叙述している」〔ネフスキー一九九一 二〇〇、*Наркнн* 1972: 27]。

第一話「メノココユール」

このテキストの初版は一九三五年にロシアで発表された。⁽¹⁾

【要約】

(叙述者) 〓わたしは兄に育てられている。

ある時、誉れ高き勇者という評判のノットカのおじ様、おじい様ともよばれている客が訪ねてきて、兄に「姪をお借りして、食事の支度をしてもらいたい」という。兄はわたしを行かせた。わたしはおじ様と暮らして、長年がすぎた。年頃になって、「おじ様はわたしを意のままにするためだけに、わたしを連れてきたのだ」という思いがした。おじ様に恋慕の情をいだいて迫るが、結婚の相手はイヨーイチの男だといわれて、おじから拒絶されつづける。ある

とき(短) 刀でおじを殺し、自分も死のうとするが、誰かに押しとどめられた。イナウチバ(幣場)に先祖の墓を用意して、おじ様を葬った。泣き泣き暮らしていると、あるとき、おじが魚の姿で夢現に現れ、「夜、墓へきて土に埋まるように」と告げる。そのようにしていると、音が響き、一条の星の光が墓の上に揺らめいた。その黄金の紐が離れそうになって、響きがした。わたしがその紐を切ると、何が残った。それはノットカのおじ様が小さくなり、おしめをした赤ん坊が降りてきたのだった。わたしはその子を大事に、一人前に育て、奥の部屋に座らせている。

第二話「メノココカラ レブンノット人」

このテキストの原文は久保寺逸彦が一九三二年に平賀エテノアから採録。⁽²⁾

【要約】

(叙述者) 〓ヤウンクルの娘

レブンノット Repunot というところでレブンノット人 Repunot-un-kur に育てられている。娘はそれが兄だと思っているが、実はそうではない。飼っている仔グマが娘の夢に現れて、「あなたは実はシスタブカのヤウンクルであるが、レブンノットの男が攫ってきて、大きくなったら嫁にするつもりでいる」と明かす。仔グマは娘を助けて、シスタブカの山城へ連れていく。そこには二人の兄がいる。

兄たちは鄭重な送りをしてクマを帰すが、クマはやがて人間として再来し、娘と結婚する。(このテキストはアイヌ語から直接英文に訳されているため、以下に梗概を掲げる。)

【梗概】

①わたしは Repunnot というところで兄の Repunnot-un-kuh に大事に育てられている。仔グマを飼って三年になる。兄はクマ送りをしようと、酒 (uinan sake と ainu sake) を用意するために和人のところへ交易にかける。兄の留守中にもわたしはクマのために美味いものをつくった。やがて兄の舟が戻ってくるが、なぜか、川下のコタンラ・ウン・クル (Kotana-un-kuh) の家のほうに荷降ろしをする。少して、その家で昼も夜も酒盛りをしているのが聞こえてきた。六日六夜酒宴が続いた。クマは大きな唸り声を轟かせ、わたしの作ったものを食べようとしない。

②ある日、夢に神のごとき少年が現れて、わたしの身の上を次のように明かす。「あなたの父さんはシスタブカの領主、誉れある勇者であり、二人の息子と一人の娘がいた。父母は交易に出て、その帰り、ヤンケ・カラプト (Yanke Karapto) を通りかかったときに、陸から手招きされた。それを拒んで岸から遠くを行くと、二百もの舟がやってきて父さんの舟を岸に着けさせ、それから

父さんは日夜毒の入った酒を飲まされた。酔った男(父さん)は酒のせいで沖のカラプトの宝を買おうと申し出た。沖のカラプトの連中は父さんの舟の守り神を見たいと言ひ、そこで戦いになった。沖のカラプトは荒れ果て、戦いはカラプト本土に移り、さらにレプンクルのあちらこちらに広がり、父さんはその戦いの最中に殺された。母さんはレプンクルの村々を戦いぬき、サンタのくへ行つた。ところがレプンクルには大勢の女シヤマン (Nupur hikehe, tusu hikehe) がいて、母さんは捕まってしまった。その時にレプンノット・ウン・クルが母さんの背からあなたを攫つてきて、密かに育ててきた。大きくなったら嫁にするつもりでいた。今やあなたが大人になったので、酒を買い、アイヌの酒を醸してクマ送りをしてから、結婚しようと思ったのだ。

毎日昼も夜も酒宴をしているのは、そのコタンパ・ウン・マツト (Kotampa-un-mat) があなたと仔グマとが犬のような非道な振る舞いをしたと養兄に告げたせいだ。それで明日の朝養兄と村人たちがわたしたちを殺しにくる。明日の朝、食事をしたら着物を着て、わたしの傍にびったりとくっついていなさい。何事があっても一歩たりともわたしから離れてはいけなさい。」

③次の日の夜明けに、仔グマは檻から出て、わたしを助け、逃げ出す。槍や弓をもった大勢の人が群がり押し寄

せてくる。クマはその群集のなかへ突進して戦い、ついにはレブンノットの村を全滅させる。

④それから、クマは「あなたを生まれたシヌタバカへ連れて行く」と思うが、わたしのする通りにしなさい」という。二人は海岸へ出る。クマはわたしを背に乗せて、海を渡り、ようやくのことで大きな川の河口に辿りつく。そこで休んでいるとクマの息のなかから次のようなことばが聞こえてきたような気がした。

「この川の上のほうへいくけれど、村の傍を通ると、人々が、『見ろ、レブンノット・ウン・クルに養われていて、犬のような邪なことをしたという奴らがやってくるぞ、それだけでなく、レブンノットの村を全滅させたのだ。やっつけよう』と非難する声が聞こえてきて、弓矢や槍を持った人々が殺しにくるだろう。だが、わたしから一歩も離れずにいれば、無事でいられる。」

⑤川をさかのぼっていくと、大きく立派な村があり、その傍を通ると、「あの非道な者たちがやってくる。二人とも殺してしまえ」という声がして、その声は上手に伝わっていく。そして弓矢や槍をもった大勢の人々が飛び出してきた。わたしの仔グマはその真っ只中に突っ込んで野葡萄の蔓の輪のように身体を振り動かし、槍や弓矢を折り、人をつかまえては放り投げ、大勢の人間たちは一人もいなくなった。

⑥それから先へ歩いていくと、海辺に出た。そこを行くとき小さな川があり、その川の中ほどに険しい崖がある。曲がりくねった路を上っていくと、両側に仏像 (potoke) があり、頂きには立派なチャシ (chashi kamui) があり、その内には大きな家があった。わたしの仔グマは自分でイノウチバのところへ行って、それにもたれなかった。

⑦家のなかから美しい髪と髯の男の人が出てきて、わたしと仔グマに気づいて家に戻る。ややあつてから、男の人はイノウをつけた鍔をもつてきて、それを仔グマの首に結んで、「えらい神様が来てくださったお礼です」と唱えた。仔グマに促されて、わたしが家のなかに入ると、仔グマもついてきて、上座に落ち着いた。家の上座には宝器が燦然と輝いていて、そこに誰かが居る気配がしたけれど、姿はみえない。やがて、件の男の人が、わたしたちがやってきたのはどういう理由なのかと尋ねた。わたしはこれまでの身の上と一部始終を話した。すると、兄カムイオトプシと宝器のところから降りてきた兄とが、「わが妹よ」といって、わたしを撫で擦り、互いに涙にくれた。それから仔グマのために外に檻をつくり、わたしたちはそこで仔グマを大事に育てた。

⑧カムイオトプシがクマ送りのために和人のところへ交易にでかけ、酒をととのえ、祭の準備が進められ、近隣に

知らせを出した。カムイオトプシはこう言った。「イシカリ・ウン・クル (Ishikar-un-kuur) の弟はどうしてレブンノット・ウン・クルの助太刀をしたのだろうか？ わたしの妹と重い神様を殺すことになったのに。だからあの村は全滅してしまったのだ。招くことはあきらめなければならぬ。」

⑨いよいよわたしの仔グマを眠らせるときになって、わたしが泣きに泣いていると、イナウ・チバの上に神のごとき少年の姿があり、彼は煌めく光の球となって、こう言った。「その気持ちに誠であるなら、儀式のときには指についた食べ物をなめることさえしてはいけない。そうすれば、万事うまくいく。」わたしは祭のご馳走をつくり、給仕を手伝ったが、料理は一口も食べなかつた。

盛大な祭はおわり、平穏な日常の暮らしをしていた。

⑩ある日、急ぎ足でやってくる者があって、家のなかへ入ってきた。そして、「わたしは送りをされた仔グマです。お土産をもらって神々を招いて、すばらしい宴会をしました。そして、父に人間の女と結婚したいと言いました。父は『それなら人間のところへ降りて行って、結婚するがよかろう』と言いました」。兄と下の兄とは鄭重に敬いの礼をして、そのことは感謝した。それからわたしたちは一緒になり、やがて別に建てられた家で何の憂いもなく暮らしている。

類伝「メノコユカラ」 [Hebokin 1972: 53-66]

これは第二話の類伝で、短いヴァージョンである。邦訳では「娘の幸せ」となっている。「ネフスキー、一九九一」ネフスキーのインフォーマントは明らかでない [Phillipi 1979: 269]⁽³⁾

異伝一 「神の仔熊が女の子を救い出す物語」 [「八重九郎の伝承(7)」]

叙述者 オタストウンクルの孫娘

異伝二 「ポユンメノコ ヤイエユーカラ (女の子が自らを物語る)」 [「サコロベの世界」二八―二九]

二 神謡のなかの「婦女詩曲的なもの」

— サケへを伴うメノコユカラ

久保寺逸彦は Mat-yukar, Menoko-yukar について、「女性のシスタツプカ媛、もしくはオタスツ媛、オタサム媛、時には、ムライ媛、沖津国媛、ルベツトム媛等をヒロインとする。……私の採集したもの15篇中、シスタツプカ媛をヒロインとするもの9篇、オタスツ媛やオタサム媛をヒロインとするもの3篇、ムライ媛、ルベツトム媛、レイイシリ媛をヒロインとするもの各1篇」と記している [久保寺 一九九七、三二―三三]。

『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』の神謡の部には「婦女詩曲的なもの」として3篇が収録されており、その理由は「サケへを伴って」詠われるためだとしている。

第四話(神謡一〇四)シヌタツプカ媛の自叙

(Shinutapka-un-mat yaieyukar)⁽⁴⁾

これはシヌタツプカ媛が養いの姉のために殺されるが、栗の樹の媼神によって蘇生されて育てられ、許婚のオタサム人に嫁ぐ物語である。サケへ Penkurato penkurato

【梗概】

- ①わたし(シヌタツプカ媛)は、栗の樹姥に育てられている。煮た栗をもって、オタサム人の許へ使いに行かされる。
- ②姥がわたしの生い立ちを語る。「シヌタツプカの城で汝の姉さんが汝を育てていた。『大きくなったらオタサム人に嫁がせるがよい』と母親が言いのこして死んだ。姉は汝をこの大野原のこの栗の樹に打ちつけて殺した。わたしは汝を可哀そうと思って生き返らせ、今日まで育ててきた」と語り、自分が天から降ろされた栗の樹婆であること、今は神の国へ帰ろうとすると告げる。
- ③姥にせかされて川下の大きな家に行き、家事をする。オタサム人に問われて素性を語る。
- ④オタサム人は、わたしの悪姉にわたしが死んだと告げられ、落胆して伏せていて、悪姉が炊いだものを無視し

ていたと云い、わたしが生きていたことを喜ぶ。共に暮らす。

⑤育ててくれた栗の樹姥の供養に大きな家へいつてみると、家はなく栗の老木が倒れている。その樹に木幣を供える。夫は悪姉を成敗する。

⑥夫とシヌタツプカの山城へ行つて、神の営む夫婦生活をし、栗の樹姥を供養しながら暮らしている。(とシヌタツプカ媛が自叙した。)

第五話(神謡一〇五)シヌタツプカ媛の自叙

(Shinutapka-un-mat isoitak)⁽⁵⁾

これはシヌタツプカ媛が海の妖精に魅入られるが、許婚者によって身を清められて、めでたく結婚する物語である。サケへ Heno ou

【梗概】

- ①わたしはシヌタツプカで姉に育てられている。年頃になると、姉が「余市人兄弟の弟と夫婦となつて、シヌタツプカの山城を守るようにと祖祖が言い遣している」と話す。
- ②ある日、姉の留守に外へ出たくなり、鎌を手に川上へ行き、大沼で蒲刈る。蒲の束に腰を下して謡を歌っていると、沖の海原から白装束の青年がやってくる。青年は「汝は天つ大口の真神(狼神)の妹とシヌタツプカの城

主の仲に生まれたもので、余市人兄弟の弟を夫にするこ
とになっている。しかし、この自分を夫にするならいず
れ劣らぬ神として夫婦になれよう」と言いよる。

③謡を歌いつづけていると、青年は血のついた杯と小刀を
取り出して、自分の頭にふり下ろし、血潮の酒の杯をわ
たしに飲ませた。それは美味だった。わたしも自分の頭
に小刀をふり下ろして、血潮の酒を青年に飲ませた。

④山城に帰ると養姉が「神の如き余市人の弟君が訪ねてき
た。飯を炊ぐように」という。それを無視して自分の臥
床に入る。背後に白装束の青年が横たわった。余市人が
起きてきて、白装束の青年をずたずたに斬り、わたしの
髪をつかんで海辺に下り、海水に浸して刃物で切り裂
き、わたしの着衣を剥いで切り裂き、海に投げ捨てると、
自分の小袖を脱いでわたしに着せ、脇に抱えて山城にも
どった。余市人は帰っていった。

⑤その後養姉から罵りの言葉を浴びせられながら、暮らし
ていた。ある日、余市人が鹿肉をもつてやってきて、そ
のまま居つづけた。ある日、余市人は養姉に「余市の村
のわが兄の許へいくよう祖祖の訓える決まりであるか
ら、赴くがよい」と云う。姉は出ていった。わたしは余
市人の傍らで神の夫婦生活をして暮らしている。(とシ
スタツプカ媛が語った。)

類伝 「木村キミさんのシスタツプカ人の妹の自叙」『英雄
の物語』アイヌ無形民俗文化財記録 第二輯所収

第六話 (神謡一〇六) オタシユツ媛の自叙

(Otashu-un-mat isoiak)⁽⁶⁾

オタシユツ媛が訪れてきた海の妖精を拒絶するが、それが許
婚であったと思い、悔いて自殺する。養兄によつて蘇生し、許
婚のチュブカ人と婚する物語。サケへ Hum

【梗概】

①わたしは養兄に育てられている。兄は毎日絹を積み上げ、
犬やネズミの穴も塞いで山へ出ていく。兄のいうには、
わたしには若きチュブカ人が襦袢のころの許嫁としてあ
る。

②兄は成人したからと言って、わたしに女子の家(メノコ
チセ)を造った。わたしはそこに移り住んで針仕事にい
そむ。

③ある日、兄の家で酒宴があるが、わたしは呼ばれない。
その夕、一人の男がやってきて、食事と寝所を用意する
ようにというが、それを断る。

④来訪者を拒絶したことが兄の言葉に背いたことだと思
い、小袖をはおり、首飾り、耳飾りをつけ、死者のいで
たちをして、鍔刀でわがみぞおちを突き刺して、意識が
なくなる。われに返ると、梁の上に手足をぶら下げてい

て、下には美しき少女の骸があった。死んで霊となつて分かつたことには、海の妖精（コシンブ）がわたしに恋慕して小チュブカ人に化けてやってきたのだ。

⑤兄の家へ行つて、「わたしにもいっしょに飲み食いさせ給え」と云う。兄はわたしの処へやってきて、死んだ少女を抱きかかえて、みぞおちの鉄刀を抜き、魂招きの鏝でみぞおちを撫で擦りながら神々に祈りを唱える。若きチュブカ人も神々に祈る。それを見て、わたしは少女の上に跳び下りる。気がつけば兄の腕のなかで目を開け、しばらく後に蘇生した。

⑥兄に問われて、男がやってきた一部始終を話す。兄は油断をしたと悔いる。

⑦酒をつくつて神々を祀る。チュブカ媛を招き、兄は媛と酒を酌み交わす。若きチュブカ人はわたしに杯をすすめ、わたしはそれを受ける。（結婚）

⑧海の妖精に拐されそうになつたのを、兄たちが神々に祈つて生き延びたことをわが子どもたちに物語つて聴かせた（とオタシユヅ媛が物語つた。）

三 アイヌラツクルⅡ西浦の神の妻覓

—「ポンオイナ」

金田一京助はメノコユカラについて次のように記している。（ユ一）

カラの変種として、「女子のユーカラ (Mat-yukar' meno ko yukar) というものがある。女子が伝承して演ずるものではないが、それよりも、曲中の主人公そのものが常に女子であるところに、この名称の本義がある。主とするところは、恋愛に絡んだ葛藤を語り、往往可憐な美しい、欧州のバラドを思わせるような、好個の小品がある。これも、どれ程あるかわからないが、多いところには一村でも数十篇を算するほどある。但し多くは、魔女の呪や、妖魔の魅入る、障礙の数々、花嫁が狂うて突然裸体になつたり、恋人を、髪を掴んでふり廻したり、慘殺したり、花耻しき乙女が、あられもない事を口にして要請したり、妖異・変怪な物語が多い上、やゝもすれば、余りに露骨な恋愛描写が、……」〔金田一一九四二、一九一—九二〕

ところで、『ユーカラ集』の第一巻には小伝『ポンオイナ』が収録されている。この一篇の叙述者・主人公は郷神の妹神で、その主題は正に「恋愛に絡んだ葛藤」であり、メノコユカラそのものである。

第七話 Pon Oina (小伝) 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』所収

これは郷神の妹神が自叙するアイヌラツクルとの恋愛結婚譚である。

【梗概】

第一段 発端（姫神Ⅱ妹神の生い立ち）

第二段 客神（西浜の神のおとずれ・幌尻神の怒り）

第三段 契り（彦神と姫神のちぎり）

第四段 天界行（婚約のあつた姫に盃を差した罪のあがない）

第五段 冥界行（婚約のあつた姫に盃を差した罪のあがない）

第六段 蘇生（彦神二度のあがないを終えてこの世にもどる）

第七段 いたずき（彦神への姫神の恋慕の情）

第八段 酒ほがい（彦神 再び来る）

第九段 嫁入り（姫神 彦神のもとシシリフムカへ嫁ぐ）

〔金成・金田一 一九七六、二五〕

【要約】

登場人物は妹神の養育者である兄と姉、襦袢のなから許婚である幌尻の神、「西浜の神」と偽って養兄を訪れてきたアイヌラックルである。物語の発端は、この来客が妹神に一献を授けたことが元で、幌尻神の不興をかい、妹神は殺される。「西浜の神」は妹神を蘇生させ、幌尻神の挑戦を受けて天界と地下界の戦いに赴こうとするが、そこで妹神の真情に感じて妹神を太刀の雌金に込める。天界と地下界で熾烈な戦いを戦いぬき、「西浜の神」はわが城に帰る。妹神はその居城の結構に感嘆して、「西浜の神」がアイヌラックルであることを察する。妹神は土産を背負って、養兄と養姉のもとへ帰る。それから酒宴が催され、招かれた幌尻の神はアイヌラックルに制裁され地下界に墮ちる。妹神はアイヌラックルの許へ嫁に行く。

四 テーマ「アイヌラックルの妻覓」のヴァリアント

― 再び神話、そして聖伝

第七話のボンオイナのテーマは、①媛神（郷神の妹）に定められた②許婚（幌尻神）があるところへ、アイヌラックル（オイナカムイ）が③西浜の神と偽って、媛神に盃を差し、そのために婚約者の怒りをかい、そのあがないの戦いに呼び出され、それを克服して、媛神と結ばれることにある。この話にはいくつものヴァリアントがみられる。神話六〇では、①媛神は村の守護神＝梟神の妹神、②許婚者はアイヌラックル、③来訪者は幌尻岳の神。神話六一では、①②③は第七話と同様である。聖伝一六、一七では自叙者はアイヌラックル、①は淵主／沼の女神、②は西浦の神。③アイヌラックルが許婚者のある女神を辱めて、戦いに駆り出されて許婚者を斃し、女神と結ばれるという話である。

第八話（神話六〇）村主の梟神の妹神の自叙（前半）

アイヌラックルの自叙（後半）

村主の梟神の妹神を、アイヌラックルと幌尻神とが妻争いする物語

伝承者 平賀エテノア 沙流郡新平賀村

サケヘ Eteinou

第九話（神話六一）村の守護神（梟神）の女神の自叙

西浦の神Ⅱアイヌラックルと幌尻岳の神の妻争いの物語

伝承者 平目カレピア 沙流郡荷葉村

サケへ 伝承者忘失

第十話（神話六二）村の守護神（梟神）の女神の自叙

西浦の神Ⅱアイヌラックルと幌尻岳の神の妻争いの物語

伝承者 平賀エテノア 沙流郡新平賀村

サケへ 不詳

第十一話（聖伝十六）アイヌラックルの自叙

アイヌラックルと西浦の神との妻争い物語

伝承者 平賀エテノア 沙流郡新平賀村

サケへ Tsumapani

第十二話（聖伝十七）アイヌラックルの自叙

アイヌラックルが西浦の神の妻である沼の女神を奪う物語

伝承者 平目カレピア 沙流郡荷葉村

サケへ 不詳

五 メノコユカラ―問題の所在

叙事詩の伝承者Ⅱ語り手について

i これまでのテキストについてみるなら、メノコユカラの

ごく一般的な特徴は、①女性を主人公とし、女性が語る叙事詩、②主人公は主としてシヌタプカの女性かオタシユツなどの女性、③内容は結婚をテーマとするということになる。つまり、圧倒的に女性に深くかかわりのある物語であるといえよう。とすれば、そのかわり方について検討することも一つの方法であると考えられる。

ii まず、メノコユカラの要件として、久保寺は「婦女のみが伝承している」と云い、同様にネフスキーも「保持者と語り手は女性である」としている。伝承者がすなわち語り手であり、それが女性であることは、殊に、アイヌの口承文芸においては一般的である。しかし、後述のように、語り手が女性でないメノコユカラの可能性も排除できないのではないだろうか。

語り手と叙述者について

iii メノコユカラのより顕著な特徴としては、物語のなかで一人称語りをする叙述者が女性、すなわちヒロインであるということが重要である。ヒロインは、しばしばシヌタプカ媛、オタシユツ媛であるが、その外に久保寺は採録例から「ムライ媛、沖津国媛、ルベツトム媛」を挙げている。そのようなテキストが明らかにされるなら、メノコユカラのより広範な検討が可能になる。また、本稿ではとりあげなかったが、金成マツ筆録のメノコユ

カラ「踊ろう跳ねよう物語」では、男女二人ずつ四人の語り手が登場して、入れ替わって語る『アイヌ民俗文化財 ユーカラシリーズ』Ⅶ～Ⅹ。

iv 恋愛や情事などをテーマとする物語を女性が語るとき、語り手が叙述主体のヒロインに自らを移入するなら、「どうしてこのように緻密な叙述になってきたものなのか、神話」と言い条（下線 萩原）、情緒纏綿、紆余曲折し、いわば小説のような細かい叙述「も生まれてこようというものである。金田一をしてこう感嘆せしめたのは「ボンオイナ」であり、その語り手は他ならぬ金成まつである」〔金成・金田一『ユーカラ集Ⅰ』一三三〕。

ヒロインと登場人物―メノコユカラの二つの類型

v ヒロインはシヌタプカ、オタシユツの女性であるのに対して、物語に登場する相手の許婚はヨイチ人、チュブカ人である（第三、四、五話）。第一話ではヒロインの出自は明らかにされていないが、話のなかで許婚が「イヨーチの男」と決まっているようであるから、やはり、シヌタプカの娘であろう。ただし、第二話では、ヒロインの娘をレブンノット・ウン・クルのもとから救出してシヌタプカに連れ帰り、結婚することになるのは仔ゲマ・青年である。

vi このような人物構成の物語に対して、もう一つのタイプの話では、ヒロインが郷神の妹神、婚約者は幌尻の神で

あるが、話のもつれと戦いの結果、結ばれる相手は「西浦の神」と偽称していたアイヌラツクルである。端的に言えば、郷神（梟神）の妹とアイヌラツクルの恋愛・婚姻譚である。

vii 第六話は「ボンオイナ」、第七、八、九話は「神謡」に分類されている。一方、アイヌラツクル／オйнаカマイの文化英雄としての物語「カマイオイナ」では、その結婚の相手は天神の娘ではなかったか〔金成・金田一『ユーカラ集Ⅱ』〕。

viii アイヌ文化では「郷神」とは村・コタンを守護する梟神とされている。「神謡」に登場するカマイは基本的に動物カマイすなわち、生身の動物である。然るに、「郷神

／村の守護神」は動物カマイの梟の特性を遺しながら、信仰神であり、動物そのものの梟ではない。つまり、神謡Ⅱカマイユカラとメノコユカラでは「梟神」の属性は異なっている。

ix 「村主の梟神の妹の自叙」の人物構成には少しばかりの変動があるものの、明らかに異伝と考えられる例（第八、九、十話）を久保寺は「神謡」に含めている。郷神が梟のカマイであり、その妹の自叙する身上話は形態的には動物カマイの自叙であるから神謡とはなる。但し、そのテーマや内容はいわゆる動物神話のそれとは大きく隔たり、正に恋愛情事の葛藤、メノコユカラである。

x 久保寺は自叙主体が女性、しかもシヌタツプカ媛、オタ

シユヅ媛の情事の葛藤の物語が「婦女詞曲的」であるとしながら、「神謡」の部に含める理不尽さ、その苦洪の原因はそれらがサケへを伴うからに外ならない。

サケへの問題

xi サケへに着目するなら、繰り返しになるが、第八、

九、十話（神謡六十、六十一、六十二）のうち、神謡六十一、六十二ではサケへは不詳であるから、本来それがあつたかどうか疑問である。

xii サケへは、神謡Ⅱカムイユカラにおいては絶対的要件であつたと認めよう。つまり、動物カムイが身上を物語るカムイユカラではサケへが必須の要件であるとして、この主題から外れたテーマの叙事詩においてサケへは本来必然的ではなかつたと考えられる。それが恣意的に選択されているのは、正に、語り手の女性たちが現実にはサケへを「我がものとして」、さまざま主題の物語を紡ぎだしたからではなからうか。

xiii 久保寺が自叙主体が女性、しかもシヌタツプカ媛、オタ

シユヅ媛の情事の葛藤の物語が「婦女詞曲的」であるとしながら、「神謡」の部に含める理不尽さ、その苦洪の原因はそれらがサケへを伴うからに外ならないと考える。

理不尽さ、その苦洪の原因はそれらがサケを伴うから

に外ならない。

六 結論

久保寺の『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』はアイヌ文化の地域的な限界をもつてはいるが、アイヌ叙事詩の考察にとつては貴重な著作である。収録されている神謡一〇六篇、聖伝十八篇は口演の形式や内容・テーマの点で実に多様性に富む資料である。そして神謡については、その多様性を括る唯一の決め手となっているのがサケへである。多様性とは言いかえれば、ここでは、雑多・無秩序ということでもあり、この労作にはサケへに呪縛された久保寺の苦慮や苦悩が直情的に吐露されていることが印象的である。

サケへがもっている限りない可能性の鍵は女性の語りにあると思う。豊かな口承文芸の環境のなかでアイヌの女性たちはサケへをもつて多様なテーマや物語を語り、新たに紡ぎだすことができた。それこそは「女性の語りの妙」であつた「荻原二〇〇九」。仮に、このサケへを除外して、久保寺の著作の「神謡」に分類されている一〇六篇について叙述主体やテーマ・内容などテキスト分析を試みるなら、アイヌの叙事詩研究の新たな地平がみえてくるはずである。「荻原 一九九六、三九四―四七七」。

金田一はメノコユカラの豊富なことに触れ、繰り返しになるが、「どれ程あるかわからないが、多いところには一村でも数

十篇を算するほどある」と記している。また、伝承者金成まつ
のノートの目録には「Menoko yukar」と表示されたテキスト
が九篇数えられる。⁽⁸⁾そうしたことに鑑みるなら、ここにとりあ
げたテキストは正に氷山の一角であろう。メノコユカラの研究
にはより多くのテキストが公にされることが緊要である。

しかしながら、今この段階で暫定的な結論を導くとするなら、
メノコユカラとは、「村の守護神（梟神）の妹神、シヌタツプカ
ヤオタスツオタサムなどのヒロインが自叙する恋愛結婚譚をモ
デルとし、多様な変形をもつ叙事詩であり、少年英雄ポイヤウ
ンベを主人公とする英雄叙事詩とは区別される物語群」として
おきたい。

注

- (1) 初版 《Восток》(Литература Китая и Японии 1935)
〔『ヴォストーク』(中国と日本の文学)、再録 Невский
1972 : 31-40; ネフスキー 一九九一 三六―四十七
尚、「月と不死」には、「メノコ・ユカラ」として二
篇が収録されている。原文は天理図書館蔵である。一篇
は「狼神自ら歌った謡」、もう一篇は「舟の神自ら歌った
謡」で、それぞれに長いサケヘが付されており、一般的
には神謡＝カムイユカラである。ここにも神謡＝カムイ
ユカラとメノコユカラの語の混用があるが、それは、お
そらく、採録者ネフスキーの見解ではなく、語り手の意

識に帰されるものと思われる。「ネフスキー 一九七一
一一七―一二八」

- (2) 英訳原文 “Woman’s Epic Repuno-unkur” [Philippi 1979 :
Selection 31]。元テキストは一九三二年十二月二十六
二十八日、久保寺逸彦が平賀エテノアから採録。訳者は
「タイプ原稿を久保寺教授から」入手。「ネフスキーによ
る短い類伝を除いて、何語にも翻訳されていない」とあ
る。[Philippi 1979 : 269]

- (3) ネフスキーの手稿はベテルブルグ・東洋文書館所蔵、ネ
フスキー文書のなかのアイヌ資料、番号27である。こ
のノートにはアイヌ語音声表記に露訳が付されている。
二〇一二年十月確認。

- (4) 英訳 “The Woman of Shinutarka” [Philippi 1979 : 30]
伝承者は平目カレピア、昭和十一年二月二十一日に日高
沙流郡荷葉村で採録。

- (5) 伝承者は平賀エテノア、昭和七年十月二十四日に日高沙
流郡平賀村にて採録。

- (6) 伝承者は鹿田シムカニ、昭和十五年八月二十日に石狩旭
川市近文で採録。

- (7) このテキストの伝承者は、金成マツである。

- (8) このリストのなかの第三〇番に、Menoko yukar, Horijashi
na terkeash na 婦女のユカラ「踊りますよ、跳ねま
すよ」がある。これは「アイヌ民俗文化財 ユーカラシ

リーズ』Ⅶ～Ⅹに「踊ろう跳ねよう物語（一～三）」として翻訳刊行されている。この物語では叙述者として、カムイコロウシウ、オタサムウンクル、ホリピアシナテレケアシナ、ボンレブンクルが登場し、ボンレブコタン、オタサムコタン、イヨチコタンを舞台とするかなり入り組んだ話である。本稿で取り上げた事例とは異なる特徴をもっている。

参考文献

Невский Н.А. *Айнский фольклор*. Москва, 1972 / ニ
コライ・ネフスキー『アイヌ・フォークロア』（L・グロ
ムコフスカヤ編・魚井一由訳）北海道出版企画センター
一九九二）、N・ネフスキー（岡正雄編）『月と不死』平凡社
一九七一

Phillipi Donald L. *Songs of Gods, Songs of Humans*.
University of Tokyo Press, 1979

荻原眞子『北方諸民族の世界観—アイヌとアムール・サハリン
地域の神話・伝承』草風館 一九九六、「女性の語りの妙—
カムイユカラ（神謡）の問題」『口承文芸研究』第三二号
二〇〇九、一一九—一二三

奥田統己「小田ステノの英雄叙事詩」『口承文芸研究』第
一八号、一九九五、八五—九八

金成まつ筆録・金田一京助訳注『アイヌ叙事詩 ユーカラ集

I、II三省堂一九七六

金田一京助『北蝦夷古謡遺篇』申寅叢書 一九一五、『アイヌ
文学』河出書房 一九三三、『アイヌ叙事詩 ユーカラ概説』
青磁社 一九四二

久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店
一九七七

札幌テレビ放送『サコロベの世界』一九七八

八重九郎『八重九郎の伝承（7）』北海道教育委員会
一九九九

主な資料

金成まつ筆録・金田一京助訳注『アイヌ叙事詩 ユーカラ集 I

—IX—三省堂 一九七六

静内町文化財調査報告『静内地方の伝承 織田ステノの口承文
芸（1）』（5）（静内町郷土史研究会）一九九一—一九九五

『アイヌ民俗文化財 ユーカラシリーズ』（北海道教育委員
会）Ⅲ（一九八〇）、Ⅳ（一九八二）、Ⅵ（一九八四）、Ⅶ
（一九八五）、Ⅸ（一九八七）、Ⅹ（一九八八）、ⅩⅧ（一九九六）
『アイヌ無形民俗文化財記録』第一、二、三輯（財団法人アイヌ
無形文化伝承保存会）一九八三

『八重九郎の伝承』（アイヌ民俗文化財口承文芸シリーズ XI—
XIX）（北海道教育委員会）一九九三—二〇〇一

（おきはら・しんこ／千葉大学名誉教授）